

唐の長安城のこと

平岡武夫

一、偉大な都市計劃

二、住む人々

三、街路・溝・沙堤・石柱

四、出勤時間

一 偉大な都市計劃

唐の長安城の圖を描いて、私はそのあまりにも大きいことと、そのあまりにも整うていることに、驚いた。

『長安志』^①の記述によると、城郭の大きさは、東西が一八里一一五步、南北が一五里一七五步である。この城郭の内らに、東西に十四條、南北に十一條の街路が通つて、そこに整然たる區劃、すなわち、宮城と皇城と、二つの市場と、百十の坊里とを、現出している。街路の幅は、南北の十一條はい

ずれも一〇〇步である。東西の十四條のうち、北から第一と第二と第四の三條はそれぞれ六〇步、第三條は一〇〇步、第五條以下の十條はいずれも四七步である。

長安志は、宋の宋敏求（一〇一九—七九）が編纂した、長安の歴代の地誌の書物である。熙寧九年（一〇七六）の序文がある。唐代に關する部分は、唐の韋述の『兩京新記』にもとずいている。韋述は唐の開元年間のもつともすぐれた歴史家の一人である。宋敏求はよい資料に恵まれていたと言える。

昔の中國人は、現代の人たちと違つて、數字による表現で自己満足する人たちではなかつたから、彼らの數字は、往々、おろそかである。長安志の數字も、彼が記すまゝに街路と坊里との廣さを總計すると、東西が六六〇〇步、南北が五八〇

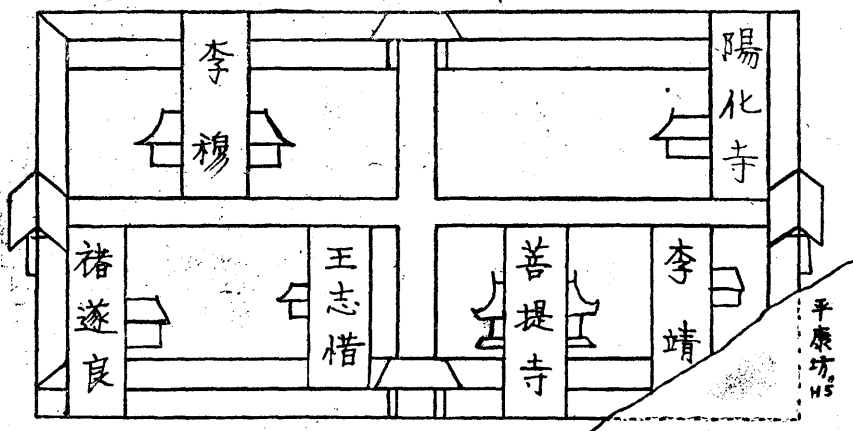
○歩になる。右にあげた一八里一一五歩は六五九五歩であり、一五里一七五歩は五五七五歩である。東西において五歩、南北において二二五歩の誤差が出てくる。前者は殆んど問題にならないが、後者の誤差は大きい。足立喜六氏は、長安志が南北の幅を三五〇歩と記す九つの坊を、三二五歩の誤と見て、これを修正しようとする。足立氏のこの試みは、單に机上の計算によるものではなく、長安に在住する間の實測の結果にものとすいてるのである。足立氏の計算と測量に従うならば、長安志の數字は、正確な數字であることがわかる。足立氏の勞作はまことに尊ぶべきものである。たゞ足立氏は唐の一尺を現在のかね尺の一尺としておられる。これは、私たちが用いる〇・九七尺に比べて、一〇〇分の三の誤差を持つ。唐の長安の遺跡は本格的に調査されねばならない。その日の来るまで、私は、長安志の數字に従つておきたい。そして一里を三六〇歩、一步を五尺、一尺をかね尺の〇・九七尺として、計算してゆく。一里は約五二九メートルに當る。^⑤

長安城の大きさを、私たちの感覺に合わせていうと、東西

は九・六九一キロ、南北は八・一九二キロになる。周圍は三五・七六六キロメートルである。まことに巨大な城郭である。私たちの住む京都の市電の烏丸車庫から京都驛まで、この南北兩端の路線は三・七七キロメートルである。昔の平安京の規模は、面積にして四分の一でしかない。

ことにすばらしいのは、街路の廣さである。南北に走る十一條は一四七メートルの幅員をもつ。それに交叉する東西の街路は、一四七メートルが一つ、八八メートルが三つ、六九メートルが二〇である。これが城壁から城壁まで、九・七キロまたは七・二キロメートルの長さになつて、まづすぐに貫いてるのである。現在の世界における最大の幅をもつ街路は、ニューヨークの第五アヴェニューであり、その廣さは一〇〇フィート、それに交叉するストリートは六〇フィートと聞く。また、ロンドンやパリの街路は、これの半分ないし三分の一しかないとも聞く。一〇〇フィートは三〇メートルでしかない。

さらに考慮すべきことは、街路の兩側の條件である。ニューヨークの街路の兩側はまちまちの高層建築物が列んでい



る。その高さに比べると、街路の幅は何分の一でしかない。谷底の感じがするゆえんである。唐の長安城の様子は、これと全く異なる。南北の十一條、東西の十四條が區切り出す坊里は、周圍に牆壁をめぐらし、原則として各邊の中央に門を開けている。白樂天は觀音臺から城内を望んで、百千の民家は碁盤に似、十二の街路は畑の畦のようだと歌っている。すな

わち、街路の兩側には、門を持つた牆壁が整然と一定の間隔をおいてならんでいる。この坊里の牆壁の高さは、私にはまだわからない。長安城の外郭の城壁の高さは唐尺の一丈八尺、すなわち、約五・三メートルである。白樂天の「和曉望」詩によると、この城壁は曉闇の中で斷崖のようにきわ立つて見えたのである。してみると、坊里の牆壁の高さはそれよりはるかに低かつたものと思われる。中國の都市の外郭城は、常に内部の民家よりはるかに高く築かれている。唐の長安の坊里の牆壁の高さを三メートルと假定することは、なお高きに失するとも、低きに失することはないであろう。しかし、假に三メートルとしても、標準的な一〇〇メートルの街路はそれの三三倍を越える。もつとも狭い六九メートルの街路も二三倍に達する。もともと廣い街路は、いよいよ廣く見える。これが一〇キロまたは八キロの長い距離を、まっすぐに大川の流れるように、通っているのである。おそらく、これは人類が持つた最も大きくして最も整えられた街路であろう。

このような偉大な城郭と街路は、一體、何の必要から設計

されたのであろうか。

長安志は、靖善坊（附圖F9）の條に、こゝより南寄りの四十坊には邸宅がなく、一面の畑であり、たまに家があつても、孤立していたことを述べている。徐松は、『唐兩京城坊考』の昇道坊（附圖J9）の條に、こゝに張庚が住んでいたが、その南は墓地であつて、住む人は殆んどなかつたことを述べている。長安志、唐兩京城坊考、その校補記の三つの書物においても、これら四十坊にはきわ立つて記録が少い。わずかにあるものも、寺や廟や亭や園の類である。

東西九六九メートル、南北八一四二メートルの長安城の中から、宮城と皇城を合せて、東西二八一四メートルに南北三二四八メートルの面積を除いた残りが、市民のための地域である。（南内のことは、しばらく、論外に置く）この地域の面積から計算すると、南の四十坊の面積は、實に全體の三割に及ぶ。換言すれば、長安城の南北の線は、現實に住む人口の必要とは別の、非實用主義的な理由にもとずいて引かれているのである。このことは、街路の大きさにおいて、特にはない。飛行機の發着もなく、自動車の洪水もない。交通

機關は馬と車である。人口も百萬程度の都市である。これらの交通量や交通機關と、この街路の大きさは、關係のないことである。

彼らの傳統的な世界觀——天下的世界觀——において、王者のいる都は、單にそこに住む人たちのための都市であるよりも、むしろ「天下」のための王都であつた。彼らは、王都は「土中」に位置するものとして考へている。「土中」は大地の中央のことである。このような位置づけは、領土または主權の上に國家を見る近代人の考へ方と全く相違する。彼らは文化の上に世界を見るのである。王都が天下の中央にあるということとは、王都が文化の中心または焦點にあることを意味する。王都の文化の及ぶ範圍が天下である。周邊は、王都からの距離に反比例して、文化の程度を稀薄にしてゆくけれども、一つの文化圏内にある。王都の文化が高ければ、それだけ及ぶ範圍が廣くなり、全面的に調和と秩序を保つことができる。文化が低ければ、事情はこれに反する。天下の調和と秩序が保てなくなつた時、王者はその資格を失う。この時、天の命が革まる。

このような王都觀が、もつとも昂揚するのは、分裂してゐた世界を大きく統一して、天下的世界觀を復興した時期である。春秋・戰國の後の漢王朝、六朝の後の唐王朝は、典型的にその時期を代表する。長安城は彼らの傳統的な世界觀の唐における顯現のもつとも大きなものの一つである。この王都の觀念のもとに、天下の最高の文化、天下の調和と秩序とを象徵するものとして、長安城は設計され、築造され、維持されたのである。彼らの生きている理念に照らして、城郭も街路も決して大きすぎるものではなかつた。

長安城の設計の數字について、もう少し考えてみよう。

宮城（掖庭宮と太極宮と東宮）と皇城とは、ともに、東西五里一五步である。この左右に六里半ずつ、合せてちょうど十三里を加えることによつて、長安城の東西の全幅一八里一五步の線が引かれる。そして、この二つの數値、五里一五步と六里一八〇步との比率は、一對一・一二二である。

長安城の南北の線のうち、その三分の一近くは非實用主義的な心から引かれていることを、私はすでに述べた。ところで、東西の一八里一一五步と南北の一五里一七五步との比率

は、一・一八對一である。南北につらなる宮城と皇城との場合、東西の五里一一五步に對する南北の長さの合計六里五〇步との比率は一對一・一五である。長安城のその比率と非常に近い。一・一五、一・一八、一・一二二、これらの比率の値は、唐人の目に黄金分割としてうつる快い割合ではなかつたのか。そして、この比率は、彼らにおいて非常な發達をした楷書の文字の、あのすぐれた藝術作品である文字の、形體の構成にも見出される標準ではないのか。

二 住む人々

長安城内に、どのような階級または職業の人が、どれほどの數において住んでいたか。これは非常に重要な問題である。長安の文化も經濟も社會も、この問題と無關係に考察されては、甚だしく具體性を缺く。しかし、この方面の資料は極めて乏しい。唐朝三百年の歴史にも激しい推移がある。確實な結論を出すことは、ほとんど不可能であろう。とはいふものの、すでに唐の長安という一つ概念が東洋史學に成立しているからには、それに相應して、長安の人口につ

いても、一つの概念が成立しておらねばならない。たとえ確定的のものではないにしても、今は今なりに、一つの見當をつけているのでなければ、唐代の歴史を現實に考えて行くことはできないはずである。もともと、この一篇は、某年某月某日の長安の事實を述べるために筆を執つていたのではない。一つの見當をつけてみよう。

この人口の問題について、畏友外山軍治君が洒脱な筆で論じたことがある。^④韓退之の貞元十九年の作品「論今年權停舉選狀」の中の文句「今京師之人。不啻百萬」をとり出して、長安の人口を百萬と見ている。百萬説は、石田幹之助先生が『長安汲古』にすでに述べておられるところである。たゞ石田先生の數字は、想定であるのに對して、外山君は唐代の人の文章の中から「百萬」という數字を見つけて來たことに、お得意さがある。しかし、同時に、外山君は、この數字が文學者の文學的表現であつて、現實から浮いているかもしれない不安のために、言葉を費している。この懸念はもつともなことである。韓退之は、貞元二年の作品と言われている「出門」の詩にも、「長安百萬家。出門無所之」と、共に語るべ

き人のない悲しみを歌うている。また元微之の「遣興」十首の第二首にも、「城中百萬家。冤哀雜絲管」と、うき世のかなしみを述べている。これらの用例のあることは、「百萬」の客觀性を證明することにもなるが、同時に、それが詩語として安定している言葉、それだけに詩に容易に使われる言葉であることにもなる。しかし、私も外山君の百萬説に賛成するものである。何らかの裏付けをしなければならない。

長安城内に、どれだけの戸數があつたのか。長安志によると、朱雀門街より西の長安縣管轄の部分が四萬戸であり、それは、東の萬年縣管轄のそれよりも多かつたのである。合せて八萬戸よりは少いが、しかし、それよりそうは隔たらぬものと見てよからう。

この一戸當りの人數はどれほどであらうか。外山君は五人強として計算している。これは常識的な數字ではある。しかし、長安における人口が、ことに奴婢をも入れて數える時、一戸當り五人強と見るのは、どうであらうか。外山君が引く韓退之の文には「十口の家」という言葉が使われている。し

かも、この數字が一戸當りの人數の少ない場合、少くも平均以上には絶対に出来ない場合のこととして使われていることは、文章の前後から明らかである。すでに韓退之の「百萬」の數字を採用するからには、同一人の同一文章の中の「十口」の數字をも採用すべきではあるまいか。戸數を八萬弱、一戸の人口を十人強とするならば、その全體は八十萬に前後する住民——庶民と官吏とその關係者——の數がかぞえられる。

長安の人口の大きな部分を占めるものに、禁軍の兵士と寺院の僧尼およびその奴婢がある。

長安には左右の六衛、合せて十二衛の兵士が皇城内にいた。天子の儀仗や警衛、都市の警備を擔當するのである。その兵士の數は、はじめの府兵制度の時に、八萬を下らなかつたと、濱口重國氏が述べておられる。^⑤新唐書の兵志によると、府兵制度が崩れて、驍騎が編成された開元十三年には、一衛毎に一萬人、合せて十二萬人の衛士がいた。さらにこの制度が崩れて、兵士の數は減つてゆくが、天寶七載に羽林軍の飛騎の定員が一萬五千人であつたこと、唐會要卷七十二に見える。羽林と龍武の左右の禁軍の總數は六萬となる。この

他に、東宮のためにも六つの率府があつた。長安在住の兵士の數を、數萬ないし十萬として見當つけることは、不當ではあるまい。

僧尼の數は、まことにやつかないものである。唐會要卷四九の僧籍の條にいう。

天下寺五千三百五十八。僧七萬五千五百二十四。尼五萬五百七十六。

會昌五年。勅祠部檢括天下寺及僧尼人數。凡寺四千六百。蘭若四萬。僧尼二十六萬五百人。

前者の數字は、六典および舊唐書職官志の祠部にいうものと同じである。開元末年の數字と思われる。これによると、一寺當りの僧尼の數は二三・五である。後者によると、蘭若をはずして寺だけで見ても、一寺當りの僧尼の數は五六・五である。

この數字をなつとくすることは、私にはできない。少くも、長安城内の寺院の事實とは考えにくい。唐の寺院は、ことに長安のそれらは、非常に大きいものであつた。景雲二年に辛替否の述べた「陳時政疏」(全唐文卷二七二)は、金のある

ものやわる賢いものはことごとく沙門になり、沙門にならな
いものは、貧乏人と善人だけであること、寺院の壯麗さは宮
殿とひとしく、しかもその経費は宮殿より以上であること、
天下の財の十分の七または八を寺院が占有していること、こ
うしたことを述べている。唐の寺院の豪勢さという文献は多
い。ことに長安の寺院は、天子または貴族の後援によつて、
豪奢を極めていた。この豪奢な寺院の維持と消費に、一寺當
りの僧尼の数が二十人五十人であつたとは、信じにくい。ま
た、右の會昌五年の數字は、同年八月の制書にいうところ
の、寺および蘭若をこわし、僧尼を還俗させた時の數字と同
じである。これらの數字は、事實の數字であるよりも、むし
ろ、何かの事情をもつてゐる數字であるように思われる。ち
なみに、會昌五年八月の制書には、天下の寺院および蘭若の
奴婢を十五萬人という。一寺當り、蘭若を除いて、わずかに
三二・八二人である。蘭若を加えると、三・三六人。これも
あまりに少なすぎると思う。

わが國の天平年間の法隆寺の資財帳を見ると、僧一七六人、
尼八七人、家人一二三人、奴二〇六人、婢一七九人と記され

ている。大安寺では僧侶八八七人、元興寺では賤口一七二三
人と、それぞれの資財帳は記している。持統天皇紀四年（西
暦六八九年、則天武后の永昌元年）の七月十四日の詔に「七寺の
安居の沙門三千三百六十三」とある。一寺當り四八〇人であ
る。

長安と平城と、兩者の背景をなす事情は同一ではない。せ
つかちな類比は慎まねばならない。しかし、長安の寺院の僧
尼および奴婢の数が、平城のそれより桁はずれに少いとは考
えにくい。西陽雜俎續集卷六に、慈恩寺は、十餘院、一八九
七間より成り、勅度の僧が三百という。勅度の僧だけで三百
人である。寺に住むものの數は、もとより、これよりはるか
に多いはずである。慈恩寺は進昌坊（附圖H11）の東半を占め
ている。進昌坊の面積は、私たちの坪數になおして、十四萬
八千六百四十九坪である。寺域だけでいうならば、大莊嚴寺
や大總持寺は、慈恩寺に二倍する。大安國寺は八萬五千坪、
大興善寺と昊天觀は八萬坪、大薦福寺は四萬坪である。

長安の寺院の一寺當りの僧尼と奴婢、および寄寓する者の
數は、併せて三百四百にも及ぶのではあるまいか。長安には

佛寺だけで百におよぶ。道觀を加えて計算するならば、この方面の人たちで四萬五萬の人口が數えられるように思う。

これらの人々の他に青雲の志を抱いて帝都に集る者は、何時の時代にも少くない。韓退之の右の論文は、「受験生の總數は五千ないし七千人。從者を加えても、長安の人口の百分の一にもならない」と言つてゐる。まず一萬弱というところ。長安志の西市の條には「浮寄流寓するものの數は、數えきれない」という。この世界の帝都に四方から集つてくる旅人とその從者、食いつめものなど、相當の數になるであろう。

こうして見てくると、百萬の數字は大いに現實性を持つてくる。なお殘る問題はあるけれども、一おうの見當として、この數字は認めてよいと思う。

百萬の住人は、どのように分布してゐたのであろうか。

南よりの四十坊が人煙稀れであつたことは、すでに述べたとおりである。次に述べるように、出勤時間との關係から、官吏は大明宮に近い東城に邸宅を求めた。商店街は西城に榮

えた。西城を南北に貫く永安渠と清明渠と、東西に走る漕渠と、これらの運河が、商賣の利便を提供したことであらう。

この西城すなわち長安縣の管轄する所が萬年縣の管轄する東城より戸數が多かつたこと、西市に寄宿し流寓する者が數えきれないほどに多數であつたことも、すでに述べた。

もつとも賑やかなのは、崇仁坊（附圖H4）である。皇城の景風門に近く、尙書省の試験場に最も近いので、家を持たぬ受験生は、たいてい、こゝに宿をとつた。すぐ南の平康坊には、南・中・北の三曲の妓樓街がある。東南は東市につらなる。この地勢にある崇仁坊が、長安第一の交通量を持ち、聲かまびすしく、夜どおし燈火が絶えなかつたのも、當然であらう。この坊は、また、樂器を作る家が集つてゐることにおいても、特性をもつてゐる。中でも、趙家は特に名手として知られてゐた。

坊里の一つ一つの事情や個性をわきまえることは、努めてなされるべきことである。しかし、いまはその暇を持たない。後の機會を待つ。

三 街路 溝・沙堤・石柱

元和十年六月三日の未明に、永興坊（附圖H3）の東の街路、坊を北にはずれた所で、出勤途上の裴度が襲撃された。刺客の初めの一太刀は彼の肘あてを切り、二度目の太刀は背を打つて衣服を裂いた。三度目の太刀は頭に切りつけた。彼は、いたゞまれず、馬から落ちた。落ちた所が溝であつて、その中に落ち込んだ。刺客が姿勢を整える間に、隙ができた。従者の王義が組みついて、大聲を立てた。刺客はあわてた。溝に落ちた裴度は動かない。死んだものと思つて、刺客は王義の手を斬り拂つて逃走した。裴度は運よく毛の帽子をきていたので、頭の傷も全治二十日の程度ですんだ。

溝 この事件から考えられることは、長安の街路には、人が落ち込むほどの大きな溝があつたことである。

延喜式卷四二の「左右京職」の條を見ると、二八〇尺の幅を持つ朱雀大路は、二三四尺の車馬道を中央にして、その左右に、それぞれ、五尺の溝と、十五尺の犬行と、坊の壁の中心までの三尺と、この四つの部分から成立している。長安の

街路の構造がどういふものであつたか。平安京のそれがどれだけ長安のそれと關係しているか。いずれも明らかではないが、しかし、延喜式の記事は一つのヒントを與えるに足りる。溝の存在だけではなく、人道と車馬道の區別も、類推してよいものであらう。溝の幅は街路の幅に第一義的に規定されるものではない。平安京でも、幅十丈、八丈の大路の溝の幅がともに四尺であり、四丈の小路のそれが三尺である。長安の南北の大路は八メートルあるが、その溝の幅は、かならずしも、八メートルに比例するものではなく、やはり數尺のものであらうか。

沙堤 この六月三日の事件は、出勤の通路と沙堤とのことに関して、私の注意を惹く。

裴度の當時、出勤者は大明宮の建福門の前に集つて、定刻に門の開くのを待つて、参内した。彼の家は永樂坊（附圖G8）にあつた。坊の東側は啓夏門街である。建福門に行くために、この街路をまつすぐ北に行つて、皇城と宮城の東側沿いに、北につき當り、東に折れるのが、一番の近路である。然るに、裴度はこの路を通らないで、一つ東の路を行つてい

る。刺客は裴度をねらつて、待ちうけて刺したのである。彼がこの路を行くことは、周知の習慣になつていたのである。

彼は何故にこのような路を選んだのであろうか。

唐には、新たに大臣が任命されて参内する時、その私邸から宮城の東側の路まで、白沙を敷いて、「沙堤」を作るしきりがあった。これによつて、風にも塵はあがらず、雨にも泥はあがらない。槐樹の緑の下、白沙の光る上を、朱衣の先導官が騎馬で行く。路傍の高樓も鳴りをしずめ、車も人も通行を止める。町役人のけいひつの聲に、前方五キロの程はものかげを見ない。張籍の「沙堤行」の詩は、その日の盛儀をこのように歌っている。溫庭筠の「臺城曉朝曲」には、丞相の車を「朱網龕簷」と形狀している。形は描けないが、色はわかる。木の緑、人の朱に映えて、沙堤の白さはいよいよ冴える。

この白沙は長安城の東郊の滌水の河原から、官牛が官車に積んで運ぶ。おびただしい量を要するので、くり返して往復さされる官牛の首は、沙の重さに耐えかねて、皮が裂け、血が流れる。白沙の上を行く丞相の馬蹄は汚れないけれども、

官牛の苦しみはあまりに甚だしい。兩者を對比する時、詩人の胸は憤りに燃える。白樂天に諷諫を寓した「官牛」の詩があるゆえんである。

この沙堤は、新任の儀式にはかならず通つたが、平常の出勤には、使用しない人のあつたことを、裴度の事件は語るようである。しかし、通行を禁止されていたわけではないようである。張籍の「早朝寄白舍人嚴中」の詩に「燭暗有時衝石柱。雪深無處認沙堤」という。また、同じ人の「春日早朝」の詩に、「曉陌春寒朝騎來。瑞雲深處見樓臺。夜來新雨沙堤濕。東上關門應未開」という。これらの詩などから見ると、「沙堤」が出勤路ということの代りに用いられている文字でない限りは、張籍はこの路を常に通つていたことになる。彼は、はじめ延康坊（附圖G7）に住み、後にある寺に寄寓し、さらに靖安坊（附圖G9）に移つた。不明の寺を除いて、二つの坊は、そのいずれからも、沙堤を行くのが近路になる。

しかし、宮城の邊は低濕地であつた。宮城がありながら、天子がそこに住まないで、もつぱら東の方の高地にある大明宮にいて、そこで政治を見ていたのも、宮城の低濕さを嫌う

たからである。それ故に、大臣任命のたびごとに、沙堤を築く必要もあつたのである。平常の日には、快適な通行路ではなかつたのであろうか。

石柱 右に引いた張籍の詩の「燭暗有時衝石柱」の句は、街路上に石柱があつたことを語っている。冬の朝の、早さは早し、寒さは寒し、貧乏官吏でともしびもではには出来ず、馬も足弱、ひよろひよると石柱につき當るのは、張籍一人ではなかつたであらう。この石柱は、いつたい、いかなる形をし、いかなる目的をもつて設けられているのであろうか。石敢當、馬つなぎ石、いろいろと考えられるが、今の私にはわからない。

四 出勤時間

裴度が襲われたのは出勤途上のことである。長安の官吏の毎日の生活はこの出勤から始まる。

唐の官吏の出勤時間は恐ろしく早かつた。『雍錄』卷八によると、五更五點に大明宮の建福門に入るさだめになつてゐた。今日の官廳では、開門時間は出勤時間より早く、出勤者

は定刻前に門内に入る。しかし、唐では様子が違つてゐた。五更五點に始めて門が開かれる。その時間が出勤時間である。すなわち、出勤者の方が定刻前に門前まで来て、開門を待つのである。しかも、時間ぎりぎりに来て、すべり込んで、したり顔することは、大人の面子が許さない。門前で、席次に従つて禮儀正しく待つのである。いきおい、建福門の前には、それに對應した特殊な様相が現われて来る。その第一は「百官待漏院」と「車坊」である。

「待漏」の「漏」は漏刻のことである。百官待漏院は百官が時間を持つために設けられた建物である。建福門外に門を挟んで東西に二棟立てられている。宋の呂大防の長安圖の殘石は、辛うじて大明宮の南端を残しているが、そこに明瞭にこの二棟を圖示している。「車坊」は太僕寺の管轄するもの、光宅坊に設けられている。宰相の車馬のために用意されたのである。このような設備は、他の門、他の街路、他の坊にはないものである。

翽善・永昌の二坊（附圖H1・2）の中間に路を通して、光宅・來庭の二坊を區切り出しているのも、長安城のすべての

坊里に例を見ない獨特の形である。その中間の街路が、他の南北に通る街路と同じく八メートルの大きな路であることも、注意しなければならない。この路は大明宮の正門である丹鳳門のために開かれたものであるが、出勤者のための必要にもこたえていたのである。

翊善坊には保壽寺が、光宅坊には光宅寺があることも、必要なる空地を提供していたことであろう。保壽寺はもと高力士の家であつた。それは街路を隔てて來庭坊にも連つていたと思われる大きな寺院であつた。二つの塔があつて、そこにある「火珠」は、それぞれ「十餘斛」の米が入る。火珠を屋頂にしつらえることは、則天武后が證聖元年に明堂を再建した時にも見える。火珠は、貞觀四年五月に林邑國が献上した、あの種類の火珠であろうか。もしそうであれば、それは水晶質の卵型のもので、日の南中する時に、この珠で日光を受けて艾にあてると、火が出るので、この名があるのである。唐の一斛は我々の三斗九升八合であるから、「十餘斛」といえば、四石の量を越える。この大きな火珠を載せている塔の大きさ、その塔を二つ持つている保壽寺の大きさを想像

して見るがよい。

光宅寺は則天武后が尊崇した寺である。武后が七寶臺を築いたので、七寶臺寺の別名を持つている。その七寶臺は、こられた、きわ立つて高い建物である。こゝに登ると、四方いずれにも視野をさえぎるものがなかつたと、西陽雜俎は述べている。光宅寺には、もとより塔もある。この高臺や塔をその一部とする寺の大きさは、これまた、容易に想像できよう。

これらのいくつかの様相は、要するに、出勤する百官の交通と待ち合せを可能にするための條件であつた。天氣のよい日には、彼らは、待漏院から出て、これらの寺の境内を散歩して、時間待つこともあつた。光宅寺の塔の風鐸の中に、一つ、すばらしいものがあつて、その美しい音色に耳をすました風雅な人の話も、傳わつてゐる。

永興坊の東北角の街路上で起つた裴度襲撃事件の發生時間は、この地點から建福門前まで行く時間と、門前における待ち時間とを、五更五點から遡つた時間である。

門前での待ち時間を、假りに三十分としておこう。門前ま

での時間は、どれほどを要するか。

このころの交通機關の主なものとは馬である。女が堂々と馬に跨つてゐる土偶も、いくつも残つてゐる。庶民の乗馬を禁ずる制令が出たこともあるから、逆に、庶民もまた馬に乗つてゐたことがわかる。六典の戸部に、地方に物資をとぎける場合の一日の速度を、馬は七十里、歩行と驢馬は五〇里、車は三〇里と規定してゐる。この一里は、長安の城郭の尺度と違つて、小尺であろうから、四四一メートルである。七〇里は三〇八七〇メートルである。一時間に四キロまたは五キロの速度である。長安城内で、大官が従者をつれて出勤する時の速度も、これほどと見てよからう。建福門前から永興坊の東北角までの距離は約一六〇〇歩、二キロあまりである。三十分ほどの行程である。事件發生の時間は、さきの待ち時間の三十分と合せて、五更五點より一時間ほど前の時間である。そこで五更五點が問題になる。

五更五點は不定時である。日入後二刻半から翌日の日出前二刻半までの間を五更として、一更を五點とする。日入日出の時間が變れば、五更の長さも變る。夏至の日と冬至の日と

では、四時間ほどの差ができる。事件の日、元和十年六月三日の五更五點は、長安地方時において、何時何分になるのか。長安は北緯三四度一五分二〇、東經一〇八度五五分五四の地點にある^①。この地點における一年間の日出日入の時間を計算することは、人によつて見解を異にする性質の問題ではないから、誰か一人が計算して提供すればよいことである。それが今までになされていなかったのは、どうしたことなのか。唐代の歴史の研究は、長安の毎日の時間を超越してなされるものではないはずである。單に出勤時間が日出日入に規定されるだけではない。日々の生活に絶對の關係をもつ東市西市の開場と閉場の時間も、太陽の南中する時と、日入前七刻とに定められていたことが、六典の兩京諸市の條に見えてゐる。漏刻係のものが寝すとして、太鼓を叩くのがおくれ、

それだけ次の太鼓との間の時間がせばまり、出勤する官吏を面くらわせたために、懲戒を受けてゐるものもある。しかし、これを逆用して、クレーダーを乗り切つてゐる場合も、一度や二度ならず、通鑑に記録されてゐたと憶えてゐる。定刻に太鼓を打たないことによつて、叛亂者の作戰に狂いを生

じさせ、自分の方は時間をかせぐのである。時間を抑えている當局者の強みを利用したのである。唐の長安の街には、戀をさしやく人の姿を多く見かけるけれども、それらの人々にも、日入日出の時間は深く關係する。長安の生活の實態に關心をもつほどのものは、今日まで、長安の日出日入の時間表のできていないことを、いぶかしがらずにおれない。^⑤

元和十年六月三日は、ジュリアス暦では八一三年七月十三日に、グレゴリオ暦では同じ月の十七日に當る。その前日の日入時間は、長安地方時で十九時二十八分であり、この日の日出時間は五時十六分である。その間は九時間四十八分である。一日を百分した一刻の長さは一四・四分であるから、二刻半は三十六分である。九時間四十八分の前後からこれを除くと、八時間三十六分、これがこの日の五更の長さである。

従つて一更は一時間四十三分、一點は約二十分である。五更五點は午前四時二十分であり、日出前五十六分である。裴度が永興坊の東北角にさしかゝつたのは、これより一時間前、すなわち、三時二十分である。月はどうか。六月三日は太陰暦であるから、そのまゝ月の姿を示している。正確にいうな

らば五月三十日午後六時十二分（長安地方時）が朔である。三日月は前日の宵早くに西に没している。事件發生の當時、あたりはまつくらである。たいまつをたゝき消されると、犯人の顔も何も見えはしない。

十一條ならぶ南北の路幅が八メートルであることも、私の目を驚かせたが、この出勤時間の早さは、さらに私の計算を疑わせた。大明宮にあと二坊の距離を残すだけの地點で、午前三時二十分である。裴度の家のある永樂坊は、遭難の地點よりさらに五つの坊を南に行き、一つの坊を西に行つた所である。四・七キロの距離がある。その東門を出る時間は、二時半のころである。我々の意識でいうならば、深夜である。東城の住人はまだしもよい。西城に住む人、極端な場合、待賢坊（附圖A9）に住む人が出勤するためには、彼は裴度よりもさらに一時間半早く出かけねばならない。零時をすぎたばかりの頃である。東城に官吏が集まり、西城に庶民が多く住むのは、當然の勢である。

もつとも、右の計算は、ゆつくりと馬を進ませた場合であり、日もグレゴリオ暦で七月十七日、夏のさかりである。ギ

ヤロップで奔らせると、多少の寝坊はできるけれども、従者がついて來れないし、體面も悪からう。冬のさかりならば、時間は二時間近くゆつくりする。しかし、夜の時間が長くなれば、それだけ一更一點の時間も長くなる。冬至の日の五更五點は、日出前一時間十分である。實感を出すために、今年の東京標準時でいうと、五時三十六分である。

長安の冬は東京より寒い。民國三十二年度の『國民曆』は、この土地の十二月の平均温度を〇・八度、平均湿度を八〇と記している。この湿度は一年中で最も高い。一年の平均は六七である。昭和十七年度の『理科年表』によると、平均温度と湿度は、東京が五度四分と六七、京都が五度と七九、山形が〇・九度と八七である。冬至のころは、十二月でも最も寒い。この時に、午前五時前に待漏院に到着するために、それより一時間またはそれ以上も早く家を出なければならぬことは、つらいことである。白樂天も「早朝賀雪寄陳山人」詩に、馬の蹄はすべる。ろうそくは消える。寒風は耳を裂くようだ。大明宮にたどりついて、ひげにつらが下がり、衣服が氷のように冷いことを訴えている。

このような出勤時間のさだめは、我々からは、非常識なことに見える。しかし、まさにそのことに、我々は注意しなければならぬものがあるのではないか。彼らには、このように、日出と日没によつて生活を規制することが、常識的な、自然的なことであつた。日出前二刻半の出仕は、日出と共に執務を、すなわち、一日のいとなみを始めることを意味する。彼らこそは、太陽を直接の基礎にして、朝をもち、晝をもち、夜を持つていたのである。今日の我々は、平均した時計板の時間を基礎にして、朝も晝も夜も失つていたのである。自然の運行に生活を合わせるものと、人間の機械に生活を束縛するものと、この兩者の相違は、唐代の人文を理解しようとするものが、注意しなければならぬ最も大切なことのひとつであらう。

註

- ① 長安志は經訓堂叢書本を用いる。
- ② 長安史蹟の研究一五一頁。
- ③ 森鹿三氏、漢唐一里の長さ、東洋史研究。五卷第六號。
- ④ 唐の長安の人口、學海四卷五號。
- ⑤ 府兵制度より新兵制へ、史學雜誌。四一卷一一・一二號。

Notes on the City of Ch'ang-an (長安) in the T'ang (唐) Period

Takeo Hiraoka

The present article constitutes a part of the author's comprehensive work on the city of Ch'ang-an under the T'ang. Chap. I: The size of Ch'ang-an in the T'ang period, measuring 8192 metres in width and 9619 in length, was amazingly big with eleven avenues 149 metres wide and with streets 88-134 metres wide crossing at right angles. The town-planning seems to have been rather disproportionately big in view of the size of population and requirements of communication, and explanation will be found in the so-called T'ien-hsia ideology entertained by the T'ang Chinese as well as in their aesthetic taste of the golden means. Chap. II: The size of population exceeded one million, including citizens, monks, nuns, slaves soldiers and temporary residents. Chap. III: Along the amazingly wide avenues there stood stone pillars, and drains were installed. One of the avenues, which was covered with white sand, was reserved for the Government officials to attend functions at the imperial palace. Chap. IV: Government employees were requested to attend their offices before sunrise, this making some special accommodations necessary. In this connection the fact must be kept in mind that they had a somewhat different notion of hour from our own.